第2問

次の文章は、小池昌代（こいけまさよ）の小説「石を愛（め）でる人」の全文である。これを読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。なお、設問の都合で本文の上に行数を付してある。（配点　50）

趣味といってもいろいろあるが、山形さんの場合は、「石」であった。「石」を愛でることであった。そのようなひとを、一般に「愛石家」と呼ぶらしい。愛猫家とか愛妻家とか、考えてみれば、世の中には何かを愛して一家を構えるほどの人が結構いる。しかしアイセキカと聞いて、即座に石を愛するひととは、ちょっと思い浮かばなかった。

5

山形さんから「アイセキカ」友の会に入会しましたよ、と聞いたときは、えっ？　愛惜？　と聞き返してしまった。山形さんは、そのころ

奥さんを、病気でなくしたばかりのころだったから。山形さんが、石を愛するようになったのが、奥さんをなくしたことと関係があるのかないのかは、よくわからない。

わざわざ表明したことはないが、実はわたしも石が好きである。どこかへ行くと、自分の思い出にと、石を持ち帰ることが今までにもよくあった。

子供のころも、海や川へ行くたびに、小石を拾っては家に持ち帰ったが、当時は石よりも、石を持ち帰るという行為そのもののほうに、特別の意味があったようだ。部屋に持ち込まれた石はきまって急速に魅力を失い、がらくたの一つになってしまった。そもそも水辺にある小石は、川や海の水に濡(ぬ)れているときは妙に魅力があるのに、乾いて

しまうと、ただの石だ。濡れている色と乾いた色って、同じ石でも随分違う。水辺の石の魅力をつくっているものが、実は、石そのものでなく、水の力であったということなのか。

今、わたしの机の上には、イタリアのアッシジで拾ってきた、大理石のかけらが四つある。イタリアの明るい陽(ひ)に、きらきらと微妙な色の差を見せてくれた、薄紅、薄紫、ミルク色、薄茶の四つの石は、これは日本に持ち帰っても、不思議なことに色あせることがなかった。

一人でいる夜、疲れて心がざらついているようなとき、その石をてのひらのなかでころがしてみる。石とわたしは、どこまでも混ざりあわない。あくまでも石は石。わたしはわたしである。石のなかへわたしは入れず、石もわたしに、侵入してこない。その無機質で冷たい関

係が、かえってわたしに、不思議な安らぎをあたえてくれる。

人間関係の疲労とは、行き交う言葉をめぐる疲労である。だから、A言葉を持たない石のような冷やかさが、その冷たいあたたかさが、とりわけ身にしみる日々があるのだ。こうしてみると、わたしだって、充分、アイセキカの一人ではないか。

そういえば、生まれて初めて雑誌に投稿した詩が、「石ころ」というタイトルだった。夜の公園に残された石ころが、まるで、なにかをつかみそこねた、握りこぶしのように見えた。それだけのことを書いた幼稚な詩だったが。

子供のときは、道に石があれば、とりあえずは、足で蹴ってみた。武器として、なにものかに向かって投げつけたり、水のなかに意味も

なく、ぽちゃっと落としてみたり、拾って、それに絵を描いてみたり、積み上げたり、地面に印のかわりに、置いてみたり……。石ころとは、随分、多方面に渡って、つきあってきたものだ。

ひとと石との、こうしたあらゆる関係の先に、石をただ見つめるという、アイセキカたちの、(ア)透明な行為がひろがっているのだろう。

さて、そのアイセキカ、山形さんは、普段も石のように無口なひとである。ある地方テレビ局の制作部門に勤務している。おいくつですか、と尋ねたことはないが、五十歳はとうに過ぎているはずだ。

山形さんの担当するインタビュー番組に、わたしが出演させてもらったのが知り合うきっかけだった。実はわたしは、テレビのない生

活をして、十年くらいになる。見たい番組というのが、ほとんどないし、たまに、人の家でテレビがついていると、テレビとは、こんなに騒がしいものであったかとびっくりする(特にコマーシャルが、ひどい)。

わたし、テレビ持ってませんから。——しかしそれは出演を断る理由にはならなかった。

わたしはこんな仕事をしてますが、テレビを持ってないのは、今では普通のことです、と山形さんは言った。しかし、見るのと出るのでは、また違う。まあ、一度くらい、遊びにいらっしゃってはいかがです?

結局、その十五分番組に、わたしは出ることを決めた。オペラ歌手

と評論家のインタビュアーを相手に、とても緊張しつつ、一生懸命になって、詩のことをしゃべり、朗読までして、収録を終えたのだ。

終わったあと、暗い夜道を一人で帰りながら、テレビとは、恐ろしく、自分を消費するものだと思った。インタビュアーたちとの関係も、あまりにも希薄で一時的・図式的なものであり、そんなことは彼らにとって、仕事のひとつなのだから当たり前のことなのに、その当たり前のことに傷ついてしまった。

そのうえ、自分の言ったことが、終わったあとも、わんわんと自分のなかで反響している。詩人という肩書きで得意になってしゃべった自分――これは一種の詐欺であると思った。そのことを自覚したうえで、玄人としてりっぱに騙(だま)せたのならそれでもいいが、わたしは半分

素人の様な顔をして、詩とは……とか、詩との出会いは……なんて遠慮がちに、そのくせ内心、(イ)とくとくとしゃべっていたのだから、なんだか、タチが悪いような気がした。

わたしのそんな落ち込みを、山形さんは、まあ、テレビに初めて出た人間はそんなもんですよ、と石のように表情のない顔で、のんびりとなぐさめてくれた。ここを通過するとね、もう怖くはありません。気をつけてくださいよ、テレビに出ることには、けっこう魅力があるようですからねえ。みんな、そう言いますよ。こいけさんもそのうちね——と山形さんは言った。——ぜったいテレビにどんどん出たくなりますよ。そう、自信を持って決めつけるのだった。

その山形さんから、「石を出品しましたので、ぜひごらんください」

という、薄いぺらぺらのはがきの案内状が届いたのは、東京に梅雨入り宣言が出された日のことだった。さらに(ウ)追い討ちをかけて電話までかかってきて、石はいいですよ、ぜひ、見にきてくださいよ、何日と何日なら、わたしも行ってますから、と。

その、動かぬ大山のような山形さんの言い方には、断(こと)わられることなど、おのれの辞書にはないというようなずうずうしさがあった。

「わかりました、じゃあ行きますよ(行けばいいんでしょ)。わかりましたよ(まったくもう)」

このわたしの返答も、充分すぎるほど失礼な言い方ではあったが、山形さんは、ともかくもわたしが行くと答えると、うむ、と満足げにうなずいて日取りを決め、それじゃあ、と言って電話を切った。

B

当日は雨だった。しかし石を見に行くのにはいい日のように思われた。傘というものがわたしは好きだ。ひとりひとりの頭のうえに開き、ひとりひとりを囲んでいる傘が。そういえば、寂しい、独りきりの傘のなかを、華やかな世界と表現した女性の詩人がいたなあ。彼女もまた、雨の日と、傘が、好きだったのだろう。五十を過ぎて、彼女は突然自殺してしまった。顔に刻まれた深い皺(しわ)が、とりわけ素敵な美しいひとだった。

そんなことを思い出しながら、会場についた。表参道の小さなアトリエである。傘の露をふりはらって、ドアを開けた。

期待したとおり、ずらっと小石どもが並んでいる。それぞれの石の前には、産地の名前と、出品者の名前が毛筆で書いてある。産地とい

うのは、平たく言えば、石を拾った場所、出品者というのは、拾ったひとの名前だろう。そう考えると、石を愛するという趣味は、実にシンプルでいいものだと思った。拾った、拾われた、その一瞬にすべてをかけて展示しているのであるから、ここにあるのは、どれもが人生の瞬間芸のようなものだと言える。

入り口のところには、パンフレットがあって、そのなかに「水石の魅力」という短い文章が書かれてあった。ただの石だと思っていたが、こういうのを、水石（すいせき）というらしい。始めて知った言葉である。

ここは、まるで、河原のようなところだ。石ばかりでなく、言葉も拾うのだ。

さっそく、パンフレットを読んでみた。

「水石は、趣味のなかでも、もっとも深淵（しんえん）で奥の深いものだといわれています。盆栽などとあわせて鑑賞されることも多いのです。

庭石のような大きなものでなく、片手で持てるような小さな鑑賞石をいいます。あなたも、水石の世界に、どうぞひととき、お遊びください」

アトリエは薄暗く、それぞれの石に、柔らかいスポットライトが当てられている。ひとの姿も二、三、ある。どのひとも、みな、一人ぽっちである。石が好きなのだろうか。彼らもまた、アトリエ内に、飛び石のように、存在している。

そこへドアが開いて、山形さんが入ってきた。

（ああ、山形さんだ）
とわたしは思った。思っただけで、声にはならなかった。
（山形さん、わたし、来ましたよ）
これもまた、声にならず、表情だけで、山形さんに訴えることになった。まるで石が、あらゆる声を吸いとってしまったようである。
山形さんも、わたしにすぐに気がついてくれたが、山形さんも、声を出さない。目を細くして、
（ああ、よく来てくれました、むし暑いのに、悪かったですね。ゆっくり見ていってくださいよ、あとでお茶でもいかがですか）
そんなことを言う。違うかもしれない。でも、そのときは、きっとそんな気がしたのである。

沈黙の空気を味わいながら、わたしは、いつしか、山形さんが出品した石の前にいた。

まるまるとした真っ黒な楕円形(だえんけい)。滋賀県瀬田川・山形寛。そんな文字がプレートに書いてある。じっと見ていると、背後から、

「よく来てくれましたね、暑いのに」

と声がした。山形さんだ。なんだかすでに聞いたような言葉をしゃべっている。

その、確かに実在する男の声は、不思議な浸透力を持ってわたしの身体に入ってきた。久しぶりにひとの声を聞いたと思った。まるで、ついさっきまで、わたしは石であり、その声によって、ようやく人間に戻ったというような、どこかほっとする、あたたかい声だった。

山形さんの顔は、日に焼けて、真っ黒だ。おまけに、何をしていたのか、汗だらけの顔である。目があった。出品された石と、良く似た漆黒の瞳である。雨が降っているせいか、しっとりとしている。こんな目を山形さんは持っていたのだろうか。決して強い目というのではない。疲れはてていて、むしろ気弱な目だ。こんな目を山形さんはしていたのだろうか。石に惹(ひ)かれている山形さんが、そのとき少しだけ、わかったような気がした。

自分でもにわかには信じられないことだが、わたしもそのとき、山形さんに、心を惹かれていたのかもしれない。C何かが何かを少しずつひっぱっている、その日は、そんな感じの日であった。

それから、ドアを押して外に出た。雨はまだ降っている。

「この先のビルの二階に、できたばかりの洋風の居酒屋があるんです。石を見たあとの一杯もいいですよ」

何も答えないでいると、

(じゃあ、いきましょう)

と、山形さんが言った(ように思った)。

言葉を使わないと、わたしたちもまた、石のようなものだ。何を考えているか、わからない。互いにころがっていくほかはない。石もひとも。ころがり、ぶつかりあって、わかりあうしかない。そう考えながら歩いていくと、

「ここですよ」

と山形さんが立ち止まる。古いビルディングの前である。それからく

るっと背中を見せ、細く暗い階段をのぼっていった。わたしも彼の後に続いた。

足元がようやく確かめられるほどの、ぼんやりとした光線がふりそそいでいる。いま、この階段をのぼっていることを、覚えておこうとわたしは思った。やがて山形さんが、店のドアを押す。中から、サックスとピアノの音が、あふれるように、外へ流れ出た。

問1　45行目(20ページ)の傍線部(ア)・75行目(23ページ)の(イ)・86行目(24ページ)の(ウ)の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 12 ～ 14 。

(ア)　透明な　12

① ぬくもりのない
② 悪意のない
③ まじり気のない
④ 形のない
⑤ 暗さのない

(イ) とくとくと

13

① 意欲満々で
② 充分満足して
③ 利害を考えながら
④ 始めから順番どおりに
⑤ いかにも得意そうに

(ウ) 追い討ちをかけて

14

① 無理に付きまとって
② 強く責め立てて
③ しつこく働きかけて
④ 時間の見境なく
⑤ わざわざ調べて

問2　32行目(19ページ)の傍線部A「言葉を持たない石のような冷や(ひや)かさが、その冷たいあたたかさが、とりわけ身にしみる」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 15 。

① 周囲の人の慰めや励ましより、物言わぬ石がもたらす緊張感の方が、自分が確かな存在であることを実感させ、それが人としての自信を取り戻させてくれるということ。

② 石と互いに干渉せずに向き合うことは、言葉を交わす人間関係の煩わしさに疲れていらだった心を癒やし、ほっとするような孤独を感じさせてくれるということ。

③　物言わぬ石の持つきびしい拒絶感に触れることで、今では失ってしまった、周囲の人との心の通い合いの大切さがかえって切実に思えてくるということ。

④　現実の生活では時に嘘（うそ）をつき自分を偽ることがあるのに対し、物言わぬ石と感覚を同化させていく時は、虚飾のない本当の自分を強く実感できるということ。

⑤　乾いて色あせてしまった水辺の石でも、距離を置いて見つめ直してみることによって、他人の言葉に傷ついたわたしを静かに慰めてくれるように思えてくるということ。

問3　わたしの山形さんへの見方は、この文章全体を通してみると変わっていくが、47行目(20ページ)から95行目(24ページ)までに描かれた山形さんの人物像はどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 16 。

① 初めてのテレビ収録で傷つき落ち込んでいるわたしを励ましし、テレビ業界の魅力を説くことで希望を与えてくれる明るさを持つ一方で、繊細な内面に図々しく入り込んでくる人物。

②　初めてのテレビ収録で傷つき落ち込んでいるわたしにテレビ出演の楽しさを説いて自信を持たせようとする度量の大きさを持つ反面、自分の要求はすべて通さずにはいられない人物。

③　初めてのテレビ収録で傷つき落ち込んでいるわたしを無表情なままに慰めてくれる不思議な優しさを持ちながら、揺るぎない態度でわたしの心情や行動を決めてかかる強引な人物。

④　テレビの仕事で自己嫌悪に陥ったわたしの心を気遣うふりをして、自身の趣味である石の魅力に引き込もうとする自信家であり、わたしの戸惑いをくみ取ろうとしない無神経な人

物。

⑤　テレビの仕事で自己嫌悪に陥ったわたしの心を見通したうえで話題をそらしてごまかし、当初のインタビューとは関係のない個人的な趣味の世界に引き込もうとする無責任な人物。

問4　96行目(25ページ)の傍線部B「当日は雨だった。しかし石を見に行くのにはいい日のように思われた。」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 17 。

① わたしは今までにも水辺の石を持ち帰ったりすることがあった。この日は雨が降っており、様々な状況によって魅力を増す石を観賞したくなる雰囲気だと感じられ、しかも、傘が石と同じように自分だけの世界を心地よいものにしてくれるように思われたから。

②　わたしにとって、石と傘は見方によって様々に姿を変えるため、これまでも気分を高揚させる鑑賞対象だった。そのうえ、河原のようなアトリエにも水石の世界があることを知ってからは、石の魅力を味わううえで、雨が思わぬ演出効果をもたらすと気づいたから。

③　わたしが以前から好きだった女性詩人の顔の皺（しわ）には精神的な陰影が刻まれ、水や光によって微妙に表情を変える石に似た魅力があった。この日は雨が降っていたので、五十を過ぎて自殺した彼女も傘を愛していたことを思い出し、孤独な詩人としての共感を覚えたから。

④　わたしは日頃から、じめじめした人間関係の悩みを忘れさせてくれる乾いた石に愛着を覚えていた。しかし、テレビに出演して自己嫌悪に陥ってからは、濡(ぬ)れた石や雨が自分の心を慰め、傘もまた一人一人の孤独な空間を守ってくれるように感じられたから。

⑤　わたしは亡くなった女性詩人と同じように、昔から誰にも邪魔されない孤独を愛していたため、傘に囲まれた空間に安らぎを感じている。そのため、雨の日はかえって外出の億劫(おっくう)さが和らぎ、他人の目を気にせず石を見に行くことができると気づいたから。

問5　159行目(30ページ)の傍線部C「何かが何かを少しずつひっぱっている、その日は、そんな感じの日であった。」とあるが、わたしはどのようなことを感じはじめているのか。わたしの中で起こった変化を踏まえた説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 18 。

①　強引で何事にも動じない山形さんが、一方では疲れて自信のない人物でもあったことにわたしは意外さを覚えている。強さと弱さが同居した山形さんの人間としての奥行きを垣間見たわたしが、自分にもそうした両面があることを発見し、石との出会いを契機として似たもの同士の孤独な二人が惹か れ合っていることを感じはじめている。

②　冷たい石と向き合う沈黙のひとときに安らぎを感じていたわたしが、山形さんの声は違和感なく受け入れられたことに意外な安堵を覚えている。山形さんのしっとりとした瞳の中に弱さを発見したわたしは、山形さんとの人間らしい相互関係を自覚し、石を媒介として二人の心の距離が近付きつつあ

ることを感じはじめている。

③　石が水の湿り気を得て輝きを増すように、山形さんの生身の声がわたしの身体に浸透し、人間関係に疲れ切ったわたしを生き生きとさせたことに驚いている。寡黙な山形さんに石の世界のおもしろさを教えられ、彼の見識の高さに感動したわたしは、自分も同じように石を出品してみたいと感じはじめている。

④　山形さんの落ち着いた人柄に惹かれ、石ではなく生身の人間である山形さんに愛情が芽生えはじめたことにわたしは驚いている。山形さんが石を愛するようになったことで孤独から脱するきっかけを得たように、山形さんとの接触が、わたしを今までの自分とは違う人間に変えるかもしれないと感じはじめている。

⑤　言葉を介した人間関係に困難を感じていたからこそ保たれていた石との関係が、穏やかな山形さんと関わるうちに少しずつ壊れてきていることにわたしは気づいている。静まりかえったアトリエの中で生身の人間との言葉による心の交流が成立した結果、孤独な詩人であることから脱しつつあること

を感じはじめている。

問6　この文章の表現に関する説明として適当なものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は 19 ・ 20 。

① 「愛石家」という語は、4行目(16ページ)から47行目(20ページ)まで一貫して「アイセキカ」とカタカナ表記である。

4行目(16ページ)と6行目(16ページ)の「アイセキカ」はわたしが意味を取れずに音だけ理解したことを示しており、これ以後の「アイセキカ」は漢字表記の「愛石家」の意味に限定されないことを表している。

②　山形さんについては一貫して「山形さん」という表記がなされ、わたしの名前については81行目(23ページ)で「こいけさん」というひらがな表記がなされている。81行目(23ページ)の「こいけさん」は、ここでの山形さんの語りかけが、わたしの後悔を他人事として突き放すような、投げやりなものであることを表している。

③　105行目(25ページ)の「小石ども」の「ども」は、通常、名詞の後ろに付いてそれを見下す気持ちを表す。この場面で「小石」に「ども」を使用しているのは、わたしが子供の頃、石を好き勝手に扱ったことを受けており、他人が拾った「小石」を軽んじる気持ちが生じたことを表している。

④

153行目(30ページ)には「こんな目を山形さんは持っていたのだろうか」、155行目(30ページ)には「こんな目を山形さんはしていたのだろうか」と、類似の表現が連続して出てくる。これはわたしが山形さんに徐々に惹かれていくにつれて、石からは次第に心が離れつつあることを表している。

⑤

124行目(27ページ)以降最後まで、山形さんとわたしが発する言葉には、カッコで示されるものとカギカッコで示されるものがある。カッコを使うものはわたしの思念や、わたしが山形さんの思念を推測したものを表しているが、カギカッコを使うものはわたしにはっきり届いた声であることを表している。

⑥

177行目(32ページ)の「サックスとピアノの音が、あふれるように、外へ流れ出た」に使われている「あふれる」「流れ出る」という動詞は、通常「サックスとピアノの音」のような主語には使われないものである。ここではこれらの動詞を「音」に対して使うことによって、詩人であるわたしの表現技巧が以前と比べて洗練されたことを表している。